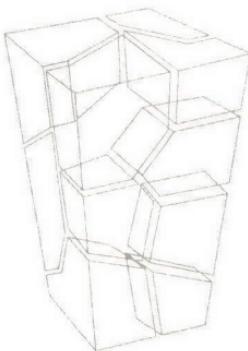


The World of J.M.Coetzee

# J·M·クッツェーの世界

〈フィクション〉と〈共同体〉

田尻芳樹 編



英宝社

目

次

序 章	J・M・クツツエーの世界へのイントロダクション	田尻 芳樹	35		
第一章	クツツエーとゴーディマ——△境界▽をめぐつて	福島富士男			
第二章	物語の外部へ				
第三章	沈黙が語るもの				
第四章	——『石の女』、『夷狄を待ちながら』、『マイケル・K』	田尻 芳樹			
	とその批評史をめぐつて	小泉 有加			
第五章	涙の語るもの——『鉄の時代』試論	根本美作子			
	残された者たちが語ること				
第六章	——『ペテルブルグの文豪』をめぐつて	脇田 裕正			
	動物のいのち／文学のことば				
181	147	119	85	55	

第八章 食人から聖餐まで

——クツツエー作品におけるもの喰うイメージ · · · · · 吉田 恭子

J. M. クツツエノ略年譜

索引

## 第八章 食人から聖餐まで

—クツツエー作品におけるもの喰うイメージ

吉田恭子

### (二) やつかいな身体

J・M・クツツエーの作品中、ものを食べる行為、情景には、格別のぎこちない雰囲気がつきまとつ。というよりもしろ、クツツエーの小説世界では、あらゆる人間らしいふるまい、とりわけ食と色をめぐるいとなみが、やつかいな行いとして描かれてしまうのだ。クツツエーの小説世界において、身体は、問題の核心であるとともに、嫌悪の対象でもある。エリザベス・コステロは、「スロー・マン」(一〇〇五)で、主人公ポール・レイマンを、「肉体への嫌悪感がつよい男」と責める。レイマンは逆に、「事故で片足を失つてなお」命に見切りをつけずに、今なおこうして生きているのは、肉体を信じてゐる証だ」と反論するが、心中「ちがう、醜いものへの嫌悪感

が強いのだ」とひそかに自己正当化をこころみる(234-35)。一方、クツツエー読者にはおなじみのコステロ女史も、レイマンの目を通して、寄る年波と疲労にうち勝てない女性として描かれるものの、そのインター・テクスチュアルな存在は肉感にとぼしいのである。レイマン家に居候を決めこむコステロが言う。「お宅の洗面所に下着を干したりしません。じやまはしないわ。ほとんどのものも食べないし。おおかたのあいだ、わたしがいる」とにさえ気づかないでしよう」(87)<sup>(1)</sup>。

やっかいな身体を描くクツツエーのことばは、詩的な比喩に高い価値をおいた言語でありながら、作家がことばの力に懐疑的であることに読者は常に気づかざるをえない。もうひとりのエリザベス、『鉄の時代』(一九九〇)のエリザベス・カレンは、末期ガンで、浮浪者ファーケイルは、アルコール中毒のため、食べものが喉を通らない。この小説で、食事をしているのは、メイドとその家族だけである。冒頭、カレンはファーケイルにコーヒーをわけあたえ、仕事をしろと説教する。ファーケイルは「はじめてわたしの目をじかに見て、黄色くて、濃い、コーヒーの茶色が混ざつたつばを、わたしの足下のコンクリートに吐きつけた」(18)。カレンは心乱される。つばは「わたしたちのあいだにさらされた、ものそのもの。わたしに吐きかけられたのではなく、わたしの前に、わたしが目にして、ながめて、思いをめぐらせられるところに、吐きつけられた」と同時に、つばは「彼のことば。彼のような者が、自らの口から、あたたかいまま、吐きだしたものとことば。言語が存在する以前の言語からでてきた、まじうつなきことば」でもある(18)。言

語に対するこのような逆説的態度は、クツツエー文学の根底をなしている。

近年、食と文学・文化的修辞のかかわりを、理論的にさぐる著作が、あいついで発表されている。とくに、マギー・キルゴアの『聖餐から食人まで』（一九九〇）は、諸研究の先鞭であり、「結合のメタファーの解剖学」という副題が示すとおり、キルゴアは、食のイメージを incorporation（結合、取り込み、抱合、in-corporation 体内・組織に取りこむこと）の暗喩としてとらえ、「個々人、あるいは個々のテクストと、外界との邂逅のモデル」と規定した上で、とくに、聖餐と食人のイメージに注意を払いながら、ホメロスからメルヴィルまで、欧米の古典を検討する。

また、エルスペス・プロビンは『肉・欲』（一〇〇〇）で、食は「他者との関わりにおいて自己を位置づける」（7）という前提にたって、食とアイデンティティーの関係、とりわけ食と性をめぐる欲望を、文化研究的アプローチでさぐり味わおうと提唱する。

ものを食べるという行いは、物理的にも、比喩的にも、身体と言語の問題と密接にからみあつてている。「プラトンの『饗宴』以来、宴と弁論はきりはなしがたく、「西洋には」文学を糧になぞらえる長い伝統がある」（Kilgour 8）。パンは「命の糧」、書物は「心の糧」であり、「人はパンのみに生きるにあらず」だが、日々最低限の暮らしは「手から口」以外のなにものでもなく「詩人は空腹のなぐさめにはならない」。そして結局のところ「人格は食事が左右する」のである。ことばを食べものにたとえる言いまわしが、どんな言語にも、数多く見られるように、もの喰うこと

と、もの言うことは、わたしたちの想像力のなかできりはなしがたく結びついている。

また、言うまでもなく、口唇をめぐる欲望であり、過度の欲に耽りかねない点で、食欲は色欲ともつながっている。暗喩的可能性を豊かに秘めた「もの喰う」イメージが、あからさまにぎこちなくとり扱われるという点のみから言つても、クツツエー作品における「摂食」は、安易に見過ごすことのできないモチーフであることがわかる。本論では、まず「ものを食べる」行為・情景がもつふくみ、摂食の比喩がはらむイメージの広がり、問題を考察した上で、クツツエーの諸作品に見る「もの喰う」イメージを、検討していきたい。

## (二) 肉食とクツツエー

J・M・クツツエーが菜食主義者であることは広く知られている。一九九五年には、イギリスの文芸誌『グランタ』食物特集号に、畜牛産業のメック、テキサス州オースティンでの経験を皮肉をまじえてありかえった評論「肉食の国」を寄稿している。このエッセーの骨子は大きくふたつにわかれていて、ひとつは殺生・肉食をめぐる嫌悪と禁忌、一般にいう宗教上のタブーの問題、もうひとつは、動物性たんぱく質の獲得・配分の過程としてみた欧米史だ。すなわち、中世・ルネサンスの歴史は、狩場の権利をめぐる闘争であつて、豪族や王族は、土地ばかりかその